

ひなく、姑丹氏と共に幼き女兒をも引き連れて親戚の家に奇遇せり。時勢の變遷のためとはいへ、悲惨の禍如何にかくも多きにや。二年を越えて、慶應三年には丹氏もまた老病にてみまかりぬ。涙の袖かわく間もなかりけん。

明治元年王政維新の世となり、恩光照さぬ隈もなく、健は免されて、家族の寄寓せし親戚原田氏の許に歸り何れも打ちよりて、往をなげき、今を喜び、悲喜交々に至りき。間もなくして、健は舊職に復せられ、新家を建てて家族を移しぬ。後に權大參事に進み、弟の任も權少參事となりて、兄弟共に心を盡くして丹氏を奉養し、孝功、清の三女も追々士人の家に嫁せしめしかば、里子も大に心安くなりしにつきても、事あるごとに、姑の君のなほ居まざばといへることを、しばしくなりき。五年に及び、健は一家を東京に移して、職を

左院に奉じけるが、十五年の春再び茨城縣に轉任して舊里に歸りぬ。

(未完)

ローランド夫人 (ついで)

鄭越生

梅一輪一りんつゝのあたゝかさ……一陽茲に來復して、江南の一枝、漸く春風に綻びなんとす、嗚呼何等の美的ぞや、嗚呼何等の自然ぞや、處女としての夫人は、所謂漸く春風に綻びんとする、江南の一枝にて、ありけるなり、夫人の家庭は、所謂温かくして和かさ春風の如くにて、ありけるなり。

或は綠葉正に滴らんとする朝、また或は皎々たる空中月輪孤なるの夕、その兩親に侍して別墅に散策を試むるを以て無上の慰樂と思ひなせる夫人は常に、深き紗窓の下に鎖され、温かき翠帳の中に包まれ、絶えて

憂き世の濁りに染まらず、極めて美的に、また極めて自然に、その處女時代を過ぐせるなり。

かく樂しきが中に獨り悲しき憂き事は夫人の母君の病ひに胃され給ひしこと是なり。夫人はそを世にも悲しきことに思ひなして自ら湯藥に侍し極めて眞實に看護しけれど、命數に限りやありけん、一夜の露と消えにしにぞ夫人の悲歎云はん方なく、しばしは涙啣ち言ともにも下りけるが、竟には涙さへかわきはて、心をうしなひて、碯とその座に打ち倒れ全く知覺を失ひたりき。

世に恐しき病ひといふ惡魔よ、汝は何が故に雍々として春の如き夫人の家庭を襲ひしことをばなし、ぞ、樂しきさまに嘔りあへる小雀の群に投せられたらん礫のごとく何がゆゑに、しかく慘刻に夫人の家庭を襲ひしぞ。

世に恐しき死といふ惡魔よ、汝は何が故に雍々として春の如き夫人の家庭を襲ひしことをばなし、ぞ、袁袁として我が子に嘔つゝ、ある親鳥、怡々として黄なる嘴を、大きく開き、競り食はんとしつゝ、ある兒鳥の群に、發射せられて親鳥を射たらん散彈の如く何がゆゑに、しかく慘刻に夫人の家庭を襲ひしぞ。

この時夫人の健康は痛く衰へたれども、幾程もなく次第に恢復し、竟に再び和樂にして安靜なる生活に復歸しぬ。

既にして、夫人の妙齡に達するや、婚嫁を求むるもの引きも切らず、然れども、夫人は期する處やありけん悉く之を斥けて顧みず、依然として讀書三昧に逍遙す。知らず誰か夫人に群玉山頭に見ゆるの榮を得るものぞ、又知らず誰か夫人と手を瑤臺月下に携ふるの果報を有するものぞ。

茲に巴里の名族にモツシユー、ローランド、ド、ラ、ブ

ラチエーといふものあり、このローランドこそ夫人と
僧老の契りを結ぶべき前世の果報を享けたる人なりけ
れ、ローランドと夫人とは是より先き數年間交際を結
び互に往復しけるがローランドは夫人の淑徳と姿色と
に深く心を注ぎ竟に人を介して結婚を求めしに、夫人
の情またこゝにありければ、事忽ちに整ひ、夫人は二
十五歳にして二十歳の兄なるローランドに嫁ぎぬ、是
れ實に一千七百八十年にして革命前八年の事なり。
當時夫人は、良人どもに、アミエンに住み、いと
樂しく春秋を送迎しけるが、聽て一女子を擧げ、夫人
自ら哺育しぬ、一般貴族の風に從へば、乳母をして、
育児に任せしむるが、常なれども、夫人は、斷然風習
に反し、自ら之に任じぬるなり、此一事を以ても、夫
人が尋常の貴婦人に、一步を抜ける事を、察するを得

べし。

この後、リオンに移り、同じく樂しき月日を送りけ
るが、一千七百八十九年、端なく閃めきたる革命の炬
火こそ夫人及びローランドの境遇に一大變化を與へた
る機會なれ。

之を例すれば、一千七百八十九年以前の、夫人の境
遇は、猶は澗々たる湖上に、その之く所を縦にして、
悠遊自適する、一葉の小舟の如し、一千七百八十九年
以後の、夫人の境遇は、怒濤天を嘯ひの處、檣將に
折れんとし楫また將に摧けんとする如し。

然り吾人は澗々たる激波の上に於ける、静けき小舟
として夫人を觀察し盡したりき、いでや筆を進めて澎
湃たる濁浪の上に於ける、雄々しき小舟として夫人を
見ん。

(以下次號)